



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4469 号 2018.7.2 発行

子ども向け文具充実 実用性+ユニークさ

大阪日日新聞 2018年6月30日



7月に日本文具大賞グランプリが決まったり、昨年民間機関で11月29日が「いい文具の日」に登録されたりと、文具の魅力発信がされる中、子ども向けの商品も充実している。便利さや機能性をはじめ、見た目のユニークさが関心を集めている。芯が折れにくいのが特徴の「オレンピツ」水彩絵の具で描いたような表現ができる「透明くれよん」



横線代わりに小さな字で百人一首などが書かれている「雑学罫線ノート」

子どもにとって使用頻度の高い鉛筆。「芯が折れにくいのに滑らかな書き心地」として打ち出されているのがクツワ（東大阪市）の「オレンピツ」だ。自社比で芯の強度は2倍以上。学校用の2Bや試験用のHBなどが発売されている。

その鉛筆が短くなったとき、鉛筆同士をつなぎ合わせられるようにする鉛筆削りが新発想として注目を集めた。中島重久堂（松原市）の「TSUNAGO（つなご）」。前に付ける方のお尻側と後ろに付ける方の頭側を凹凸に削り、接着剤でつなげる。物を大切にする精神を学べるのが特徴だ。

描く分野では、コクヨ（大阪市）の「透明くれよん」が話題を呼んだ。線画の上から塗ると、水彩絵の具で描いたように下絵が透ける。色を重ねて表現できるのも面白い。

文具の品ぞろえを充実させている梅田ロフト（大阪市北区）では、ロフト限定販売の「雑学罫（けい）線ノート」が人気。ノートの横線が小さな字や数字で書かれ、それが百人一首だったり、世界の国名だったりする。家族が子どもに贈るケースなどが見られるという。

これからさらに注目を集めるとみているのが、透明の素材を使った品。筆箱やシール入れの袋などがある。中身が見えて便利な上、かわいさが受けているとして、夏季に合わせた装いの品々を特集したりし、魅力を伝えている。

今後、定番化していくとみている一つは、1枚ずつ独立したシールを少しずつずらしながら重ね合わせ、マスキングテープのようにした商品。平面状のシールシートよりも収納しやすかったりと、利便性にも注目している。

梅田ロフト文具担当の笠原美雪チーフは「実用性だけでなく、これは何だろうと関心が湧く物に興味を持ってもらえている」と売れ筋文具の傾向を分析している。

ポロシャツ 障害者手作り、好評 4月スタート、土佐町のNPO法人 産物イラスト、300枚超販売／高知 毎日新聞 2018年7月2日
高知県土佐町オリジナルポロシャツを印刷するどんぐりのメンバー＝同町で、松原由佳撮影



障害者が働きながら知識や技術を習得する「就労継続支援B型事業所」のメンバーが、町オリジナルデザインのポロシャツ作りに取り組んでいる。「シルクスクリーン」と呼ばれる印刷手法で1枚1枚手作りしており、今年4月の販売開始以降、既に販売枚数は300枚を超え、好評だ。【松原由佳】

シャツを手掛けているのは、障害者の就労を支援している「NPO法人 れいほくの里どんぐり」（土佐町田井）のメンバー。元々は土佐町の暮らしを伝えるウェブサイト「とさちょうものがたり」の運営メンバーらがTシャツづくりをしていた。昨冬、町社協から「障害者の作業にできないか」と、とさちょうものがたり編集長の石川拓也さん（43）に提案があった。そこで、石川さんがどんぐりに声を掛け、今年4月、どんぐりによるポロシャツ作りがスタートした。

ポロシャツの背面のデザインを手掛けるのは、画家の下田昌克さんだ。昨年10月に町でイベントを行った縁から、今回ポロシャツのため、新たにイラストを描き下ろした。イラストには、タケノコやフキノトウなど町の春の産物がちりばめられている。

シルクスクリーンの印刷作業は4人前後で行っており、1枚の制作にかかる時間は10～15分程度。ポロシャツの上に版を置き、その上からインクを乗せて丁寧に伸ばす。機械を使って2段階乾燥させれば、完成だ。どんぐりのメンバー、高橋勇二さん（48）は「きれいに仕上がったりお客さんが喜んでくれたりする時がうれしい」と笑顔を見せ、職業指導員の筒井孝善さん（43）も「仕事にも地域との交流にもなる。ありがたい」と話す。

ポロシャツは12色で1枚2500円。売り上げの一部はどんぐりの運営費用に使われる。受注生産で、土佐町外からの注文も可能（送料別）。問い合わせは町総務企画課（0887・82・0480）。

障害のある人が技能を競う「アビリンピック」 愛媛で 朝日新聞 2018年7月2日

障害のある人たちが職場や学校で培った技能を競う「えひめアビリンピック」（愛媛県障害者技能競技大会）が14日、松山市内で開かれる。障害について学ぶ講座や福祉施設によるバザーもあり、見学者を歓迎している。

障害者の職業能力の向上を図り、企業や社会に理解や認識を深めてもらうのが目的で、今年で16回目の開催。「表計算」や「喫茶サービス」など7種目の競技に計52人が出場する。今大会から、データ入力の速さと正確さを競う新競技「パソコンデータ入力」が実施される。成績優秀者は11月に沖縄県である全国大会に進む。

大会当日は、企業に勤めている人を対象に精神・発達障害のある人との働き方について学ぶ無料の講座を開催。ほかにも、競技の一つである箱作りの体験コーナーや、福祉施設の利用者らが作ったパンや雑貨の販売ブースが設けられる。

えひめアビリンピックは14日午前9時～午後3時、松山市西垣生町のポリテクセンター愛媛で。入場無料。講座の参加希望者は、主催の独立行政法人「高齢・障害・求職者雇

用支援機構愛媛支部」のホームページから申し込む。問い合わせは同支部（089・905・6780）へ。（村上綾）

アダスポ岩見沢 障害者競技を体験 /北海道 毎日新聞 2018年7月2日
高齢者や障害者が気軽に楽しめるアダプテッド・スポーツを市民に親しんでもらう「アダスポ岩見沢」が1日、岩見沢市の道教育大岩見沢校の体育館であった。
パラリンピックの競技種目になっている車いすラグビーやボッチャ、車いすカーリングなど10種目の体験コーナーがあり、参加者は学生ボランティアから競技方法の説明を受けながら体験した。
普及に取り組んでいる大山祐太准教授は「障害のある方だけでなく、高齢者や子どもが気軽に楽しめるスポーツとしても興味をもってもらいたい」と話していた。
会場にはエゾシカの角を使ったストラップやオリジナルうちわを手作りするブースも設けられた。【千々部一好】

二人の青空 ダウン症の娘と母の20年 /1 43歳、思わぬ妊娠 「生まれてきてよかったね」 /岩手 毎日新聞 2018年6月29日

昨年12月の夕方。盛岡市内の居酒屋前で、有田美江さん（64）は三女の志穂さん（20）を誘ってみた。「ビール飲んでいこうか？」

ダウン症の小さな女の子が、とうとう成人を迎えた。焼き鳥を前に「乾杯！」とグラスを傾け、にこにこしている志穂さんを前に思った。「小さい頃のままだと思ったけど、大人になったのかな。あつという間だった」

思いがけない妊娠が分かったとき、有田さんは43歳。3人の子育てが一段落した頃だった。「検査を受けたらどう？」。高齢妊娠のため周囲から出生前診断を勧められたが、「授かった命だから」と思い、断った。障害のある子が生まれてくる可能性も考えたが、それが現実になるとは思えなかった。

1997年11月26日夜。当時住んでいた札幌市内の病院に切迫早産で1カ月前から入院していたが、無事に出産した。2294グラムの小柄な女児だった。すぐ、他の母親たちとは別の病室に通された。部屋に入ってくる看護師に笑顔がなく、誰も目を合わせようとしない。何かおかしい気がした。

「心音が弱く、ミルクが飲めないのでも総合病院に移しますね。ダウン症でなければ、うちで診るのだけけど」。翌日、さりげなく言った産科医の一言で、「やっぱりそうなんだ」と悟った。喜びと落胆が交錯する。新生児室で眠る我が子をガラス越しに見つめ、話しかけた。「大丈夫。障害があってもかわいいうちの子だから頑張れる。まずは無事生まれてきて、よかったね」。半分は自分に言い聞かせていた。

ダウン症、正式名はダウン症候群。最初の報告者である英国人のジョン・ラングドン・ダウン医師の名前を取って名づけられた。ヒトは22組44本の常染色体と、性染色体2本（女はXとX、男はXとY）を持っている。ダウン症のほとんどは、21番目の染色体が1本多い3本ある状態（トリソミー）により生じる。新生児の染色体異常の中では最も多く、21トリソミーとも呼ばれる。

「逆に検査しなくてよかった」。札幌市内の総合病院で、正式に医師からダウン症と告げられ、有田さんは思った。妊娠中に結果を知っていたら、動揺し、悲しい気持ちで過ごしたかもしれない。夫の英宗さん（69）は赤ちゃんの顔をのぞき込むと、「お前よかったなあ」と呼びかけた。

有田さんは退院後、毎日母乳を搾って、総合病院にいる志穂さんへ届けた。自分も夫も40代。「できるだけ長生きして、そばにいてあげたい」。雪道を走るバスに揺られながら、将来を考えると不安もよぎった。

年賀状で娘がダウン症と知らせると、知人や友人たちからすぐさま電話がかかってきた。反応はさまざまだ。

「ショックで言葉もないわ」。その言葉の方がずっとショックだった。「頑張れ」「大変なのはこれからだから」。そう言われると、心がずしっと重かった。

「赤ちゃん、いいなあ。うらやましい」。シングルマザーの友人の弾んだ声が電話口から聞こえた。命の誕生を心から祝福する声は何よりうれしかった。

妊婦の血液中に含まれる胎児のDNAを検出し、ダウン症や13トリソミー、18トリソミーである可能性を調べる新型出生前診断が国内に導入されて5年。日本産科婦人科学会が施設要件緩和の検討を始めるなど検査できる医療機関を増やす動きが加速している。「命を選ぶ社会」に向かおうとしている今、あるダウン症の娘と母の20年を追った。【藤井朋子】

二人の青空 ダウン症の娘と母の20年／2 けがでパニック障害に 新天地、一戸で笑顔戻る / 岩手 毎日新聞 2018年6月30日

2011年6月。有田美江さん（64）はダウン症の三女志穂さん（20）を連れて、札幌市から一戸町奥中山に引っ越した。こじんまりとしたログハウスで、冬はストーブにまきをくべた。夜は満天の星がくっきりと浮かぶような土地だった。

ダウン症は筋肉の緊張度が低く、全体的に成長が緩やかだ。多くの場合、知的な発達に遅れはあるが、個人差がある。きょうだいと年の離れた末っ子の志穂さんはちょっと甘い坊だが、大きな病気をせず、順調に育った。

札幌市内の小学校に入学し、特別支援学級で学んだ。志穂さんを含めて、児童は3人。教員は2人。だが、4年生の5月、けがで病院に運ばれた。教員が目を離した間に、置いてあったカッターナイフを別の児童が手にした。それが、志穂さんの顔に当たったのだ。左頬を6針ほど縫った。

心の傷は大きかった。突然、泣き叫び、夜も眠れない日が3カ月ほど続いた。暴れて家の壁には穴が開いた。医師の診断は、パニック障害。どういう態度を取ればよいのか夫婦は悩み、小さなことで言い争いが起きた。志穂さんは特別支援学校へ転校したが、好きだった外遊びもせず、学校を休みがちになった。

「成長する大切な時期なのに、このままではよくない」。有田さんと夫は、志穂さんに合う静かで少人数の学校を探した。見つけたのが、一戸町の支援学校だった。夫は仕事のため札幌に残り、母と娘で新天地にやって来た。「のんびりした環境で、地域全体で支援する気風がある。思い切って来て、本当に良かった」と有田さんは振り返る。

戦後、食糧不足の解消と旧満州（現中国東北部）からの引き揚げ者や復員者の雇用対策として、国内各地で開拓が緊急に進められた。奥中山地域はその一つで、国から派遣された八重樫治郎蔵・奥中山開拓団長たちが入植。八重樫団長の三男の妻、芳子さん（82）は「その日の食料をどうするか考えるのに精いっぱいの厳しい生活だった」と話す。

貧しい中、一致団結する精神が生まれたという。偶然、団長たち幹部がクリスチャンだったことも、後に教会ができるきっかけとなった。

奥中山は志穂さんを変えた。落ち着きを取り戻し、ときどき学校の仲間と教会の礼拝に参加した。アスパラガスのバター炒め、ハウレンソウのおひたし……。産直の野菜はみずみずしく、苦手だった野菜が好きになった。志穂さんの顔に少しずつ笑顔が戻ってきた。【藤井朋子】

二人の青空 ダウン症の娘と母の20年／3 「障害者殺傷事件」題材に 童話に託した思い / 岩手 毎日新聞 2018年7月1日

詩人たちが集まる滝沢市菓子の喫茶店「ぼくらの理由」に、有田美江さん（64）が昨

年出版したエッセー集「いわて星日和」(寿郎社)が置いてある。ダウン症の三女志穂さん(20)と暮らした一戸町での日常をユーモラスに描いた。

「何か書いてみたらいいのに」。2012年、有田さんが店を2回目に訪れた頃だった。カウンター越しで岩手での日々を楽しそうに話す有田さんを、店主の大坪れみ子さん(63)は自身が編集・発行を手がける同人詩誌に誘った。「ダウン症の子と二人で慣れない土地に暮らすのは大変だろう。書くことが何か力になればと思った」と振り返る。

寄稿した作品の中で、思い入れの深い童話がある。主人公は、八幡平市の森に暮らす小鳥たち。16年7月、相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で起きた殺傷事件を下敷きにした。

入所者19人の命が奪われ、職員を含む27人が重軽傷を負った。元園職員の被告は「障害者は生きていても意味がない」などの言動を重ねた。志穂さんが通う特別支援学校の職員や生徒たちの親と会っても、事件について話せなかった。みんな心を痛めていた。

「不幸だと勝手に決め付けないでほしい。口をつぐんだら、やっぱりいけない」。ある晩、一気に書き上げた。ストレートに書くにはあまりにむごく、童話に思いを託した。

神奈川県警は犠牲者19人について「プライバシー保護の必要性が高い。遺族も匿名を望んでいる」として名前を公表しなかった。有田さんは「悔しかった。一人一人に家族がいて思い出があるのに」。障害者の存在が隠されているように感じた。

名前を明かせない被害者家族それぞれに理由があり、尊重されるべきだと思う。「でも私は、その人がどういう人生を歩み、何が好きで、毎日どんな暮らしをしてるのか知ってほしい」

志穂さんは最近、通っている支援施設から帰ると、自宅で家庭用カラオケのマイクを握る。ゴールデンボンバーやAKB48の歌と、アニメ映画「崖の上のポニョ」の主題歌がお気に入りだ。動物好きだが怖がり、猫を見ると固まってしまう。甘えん坊なのは変わらない。夜、重いまぶたの志穂さんに促す。「もう寝たら?」「うん」。そう答えても、有田さんが寝室に行くまで黙って待つ日もある。

寄稿する詩誌「舟」は現代詩を主に掲載する。大坪さんはエッセーについて、こう話す。「有田さんは娘を相棒として受け入れ、どう人生を楽しんで生きるか見つめている。強さや明るさ、一人の女性の生き方を書いた姿が詩にも通じる」【藤井朋子】

二人の青空 ダウン症の娘と母の20年／4止 行く末を案じて 岩手の7年、心の支えに / 岩手 毎日新聞 2018年7月2日

ダウン症のある有田志穂さん(20)は3月、一戸町の特別支援学校を卒業した。県内の福祉施設を探したが、希望した所は利用が数年待ちなどで入れず、母美江さん(64)とともに、7年近く過ごした岩手に別れを告げた。この春から、母の知人が紹介してくれた栃木県の障害者支援施設に通っている。

9歳の時のけがが原因で、疲れると今もたまにパニック発作を起こし、テーブルの食器を払いのけてしまう。一戸町で寮生活をした時は、部屋のカーテンを引きちぎったこともあった。

冷静になると目の前の状況に「どうして」と驚き、肩を落とす。うまく言葉に表現できないいら立ちや不安。心がざわつきそうになると水を飲んだり、人の輪に加わらず、そつと様子をうかがったりしている。志穂さん流の心のなだめ方だ。美江さんは、そんな娘の成長をそつと見守る。

厚生労働省の研究班が「日本ダウン症協会」の協力で行ったアンケートがある。ダウン症のある12～51歳の866人が回答し、毎日の生活に幸福感を持っている割合は8割程度を占めた。自己肯定感も高い。

6月29日、仙台市で「成人期ダウン症候群の医学管理」について講演した東京都立北療育医療センターの竹内千仙内科医長(47)はこの結果に触れ、「少し振り返って考える

必要があるのでは」と語った。

ダウン症は、心臓病などの合併症を伴うことがあるが、医療や療育の進歩で平均寿命は飛躍的に延びた。一方、志穂さんのように成人になった人の暮らしの実態調査はまだ少ない。竹内内科医長によると、ダウン症のある人は認知症の発症率が高い一方、がんによる死亡率が低いという報告があるという。

4人の子どもを育てた美江さんにとって、志穂さんは最も目が離せず、手がかかった。だが「社会の見方」を変えてくれたのも志穂さんだ。4年ほど前には、宮城県の松島海岸を散歩中、オーストラリア人の中年男性から一緒に写真を撮ろうと誘われた。「ここに友達がいるよと息子に知らせたい」。男性のスマートフォンの待ち受け画面には、志穂さんと似た顔があった。これまで、知り合う機会がなかった人たちと出会っている。

志穂さんは一戸町の寮で集団生活を学んだ。休日は親子で県内外を歩いた。

いつか自分や夫が亡くなっても、岩手での日々が娘を支えてくれるだろう。ふとしたきっかけで家族の思い出を懐かしむかもしれない。たとえ記憶では忘れても、きっと心に残ると思う。【藤井朋子】

社説：北欧に見る「働く」とは（5） 「貧困のわな」から救う

中日新聞 2018年6月30日



ベーシックインカム（B I、基礎的な収入）は働いていても、そうでなくても月五百六十ユーロ（約七万三千元）を受け取れる。

失業給付に代わり導入できないか、フィンランド政府が社会実験を続ける目的は「貧困のわな」の解消だ。

失業給付は働き始めると減らされたりカットされる。働いた収入が少なく、それだけで生活できない人は就労をあきらめたりやめてしまう。結局、貧困から抜け出せない。

「こうなる恐怖が一番大きい」 B Iを担う社会保険庁のオッリ・カンガス平等社会計画担当部長は話す。わなに陥らぬ制度としてB Iの可能性を探っている。

背景には近年の経済格差の拡大や、人工知能（A I）やI Tの進展による働き方の多様化がある。

経済成長率は五年前からやっと上向きに転じたが、失業率はここ数年、8%を超えたままだ。3%前後の日本よりかなり高い。少子高齢化も進む。

A Iの活用が進めばなくなる職種がでてくる。就業できても短時間労働になり十分な収入が得られない仕事が増えるといわれる。

若者が減り高齢化が進む中で就業率を高く保つために長く働けるような社会にせねばならない。

ピルッコ・マッティラ社会保険担当相＝写真＝はB Iに期待を寄せる。

「B Iの実験対象者は経済的に厳しい人たちだが、B Iが働く意欲を後押しし前向きに人生を考える機会を提案していると思う」

実験は終わり次第、検証作業に入る。

他方で実は、働いていることや求職活動をしていることを条件に現金を支給する別の給付制度も始めた。

また四十種類もの給付制度が林立、複雑化して国民に分かりにくくなってしまった今の制度全体を思い切って簡素化し、必要な給付が分かりやすく国民に届くようにする案も検討されている。

どんな支援なら働く人が安心し増えるのか。いうなれば、走りながら考えている。（鈴木穰）

北欧に見る「働く」とは（6） 国民が安心できてこそ 中日新聞 2018年7月2日

北欧二カ国を見て強く感じるのは、危機意識を持ち将来を見通し対策を練る姿勢だ。当たり前のようだが、先送りはしない。

スウェーデンの職業訓練は絶えず改善が加えられている。フィンランドの社会実験は導入するか分からない制度の検証に国の予算を投じている。

企業側ではなく働く側に立つ視点を忘れていない。国民が意欲を持って働けてこそ国が成り立つと考えている。経済界が求める高度プロフェッショナル制度を創設させた日本政府とは姿勢が違うのではないか。国の大小は関係ない。学びたいところだ。

日本ではどうすべきだろうか。

日本の働き方の特徴は終身雇用制度だ。これを大切にしながら、能力を生かすために転職したい人や、正社員になりたい非正規社員がそうなれるような職業訓練や教育の機会は増やすべきだ。

今、支援が必要なのは、低収入で雇用が不安定な非正規社員と、個人で事業をする人たちだ。

非正規は雇用されていても職場の健康保険や厚生年金に加入できないなど法制度の「保護の網」は限定されている。確かに企業の負担にかかわる。それでも網の拡大や正社員化は国の将来を見ればもっと進めるべきだろう。

生活保護制度は収入があると利用しにくい。フィンランドのように働いても低収入なら、それを補う給付制度は検討に値する。

日本では非正規の増加で格差拡大は最大の課題となっている。富の再配分の見直しを通して是正する必要がある。スウェーデンは再就職による安定した賃金確保で、フィンランドは低収入を補う社会保障の給付で格差をなくそうとしている。

日本でも人工知能（AI）の進展などで個人で事業を始めたり起業する人が増えそうである。だが、「保護の網」は雇用される人が対象でこうした人はそこから漏れる。働き過ぎの防止や、最低賃金の保証、失業給付、労働災害の補償などが無い。働き方が多様化している以上、それに対応した制度の改善に取り組みかねばならない。

日常生活や将来に安心できてこそ働き続けられる。人の幸福の原点でもある。（鈴木 穰）

インクルーシブ教育 障害児も普通学級に 排除でなく受容を 金沢でシンポ /石川

毎日新聞 2018年7月2日



シンポジウムに登壇した一木玲子さん（奥右端）と酒井美耶子さん（同左端）＝金沢市香林坊1の県教育会館で、日向梓撮影

全ての子供たちが障害の有無に関係なく普通学級で学ぶ「インクルーシブ教育」の実現を目指すシンポジウム「めざそうインクルーシブ教育実現・北陸の集い2018」が1日、県教育会館（金沢市香林坊1）であり、約100人が参加した。

インクルーシブ教育は国連の障害者権利条約で定められたもので、障害のある人とない人が同じ権利を行使できるよう調整する「合理的配慮」が必要とされる。

インクルーシブ教育を研究する一木玲子・大阪経済法科大客員研究員は講演で、全盲の児童が運動会に参加した例を挙げ、「子供たちが話し合い、その子の親友が『自分が名前を呼びながら前を走れば良い』という結論に至った。合理的配慮は、大人だけでなく子供を巻き込んで考えるのが大事」と説明。「一部の人を排除していくと、自分もいずれ排除されることになる。学校は全ての子供を受け入れる場であってほしい」と訴えた。

シンポジウムには、娘が小学校の支援学級に通っている白山市の酒井美耶子さんらも登

壇。酒井さんは娘の付き添いで行った学校で、2年生の男子児童が支援学級の児童に「お前って障害者ねんろ」と言ったのを目撃した経験から、「少数派が弱い立場に置かれるということが、子供社会の小学校でも起こっている。障害のある子を持つ親としては恐怖でしかない」と心情を吐露した。

一木さんは「日本では多様な人と生きる機会が制度によって奪われてきた。だが障害のある仲間と育った子供が大人になり、『分けるのはおかしい』という感覚も生まれている」と述べ、「支援学級は避難所と同じ。その子が本来いるべき場所を整え、安心して戻れるようにしないといけない」と指摘した。【日向梓】

凸凹の輝く教育／触れ合う面白さ知る 朝日新聞 2018年7月2日



ダンスのレッスンに励む齋藤さん（右）。講師と一緒にステップを練習した＝足立区

◆東京未来大学みらいフリースクール

「あんまり拡大しないで。顔を見られるのが恥ずかしいから」
東京未来大学が運営する「みらいフリースクール」（東京都足立区）に通う中学2年の齋藤樹音（じゅね）さん（13）が差し出したスマートフォンの画面に映るのは、遠足で行った臨海公園や校庭で開いた体育祭での集合写真だ。どれも仲間と笑い合う齋藤さんの姿がある。「そういえば、苦笑いとか作り笑いとかしなくなったな」。通い始めて1年ほど。自分のうれしい変化にふと気がついた。

児童心理や保育などが学べる同大学は発達障害や不登校の子どもらを対象にした個別学習塾を開いている。みらいはその塾に通う子どもたちの進学先の一つとして設けられたのが始まりで、今は小学4年～中学3年の30人ほどが通う。

時間割や学習のペースはそれぞれ。齋藤さんは週5日通い、放課後の学習講座やダンスのレッスンに参加する。最近立ち上げた生徒会の活動もあり、忙しい日々を送っている。

それも、教室での生活が楽しいからだ。徐々に味わう気持ちを、齋藤さんは大事にし続けたいと思う。

小学4年の頃から学校を休みがちになった。元々、自分が伝えたいことをうまく表現するのが苦手だ。それが友だちとのけんかを招いたり、よくない言い方をして相手を傷つけてしまったり。その繰り返しで怖くなり、誰かに話しかけるのが出来なくなった。

みらいには小学校卒業間際の3カ月間通い、中学校の新学期からは親のすすめで他県にある別のフリースクールに入った。ただ満員電車での通学やなじめないクラスは気が重たく、再び休みがちに。

何よりも、一時期だけども味わった「男女や年の差を気にせず、みんなで仲良くできる雰囲気」が恋しかった。両親と何度も相談し、秋からみらいに戻った。

2カ月に1度の校外学習やお泊まり会などの学校行事は、齋藤さんにとって「中学生らしさ」を感じられるとびきりの瞬間だ。

副園長の小川孝裕さん（49）は「集団生活に悩んでここに通うことになった生徒は多い。でも、集団だからこそ面白いことができる経験を得てほしい」と話す。みらいを卒業し、それぞれが目指す「外」に巣立つまでに感じてほしい思いだ。

今は思春期まっただ中。進路や親子げんかなど、悩みも少なくない。ただ両親が友だちの話を楽しそうに聞いてくれる時は誇らしい気分になる。

理由ははっきりしている。「何だか、みらいでの生活そのものを理解してもらえた気持ちになれるから」（横川結香）

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

